

種子島と種子鉄

朱美 潮

鹿児島から南に航路四時間。種子島は、四方を太平洋と東シナ海に囲まれ、ブーゲンビリヤやハイビスカスが咲き誇る南国の温暖な島である。

『種子島』と言えば、だれもがまず思い出すのが『鉄砲伝来』だろう。そして現在は科学技術庁の宇宙センターのある島として記憶している人も多いだろう。だが、この島に伝統工芸の手打ちの『種子鉄』があることを知っている人は意外に

少ない。またこの鉄が鉄砲伝来と時を同じくしており、四〇〇年以上の伝統を持つてゐるのを知る人は、なおさら少ない。

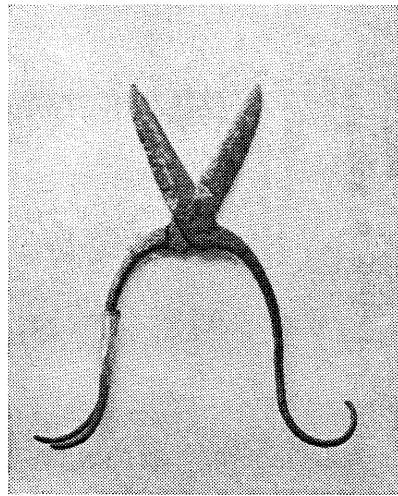
種子鉄がいつ、どのように伝えられたかを正確に示す資料はないが、一五四三年（天文十二年）にポルトガル人によって鉄砲が伝えられた時、同じ難波船に乗っていた明の鍛冶職人が、島の刀鍛冶に唐鉄を伝えたのが始まりといわれている。

全国で二字型の和鉄を使っていたころ島民は洋鉄形態の種子鉄を知っていたのである。

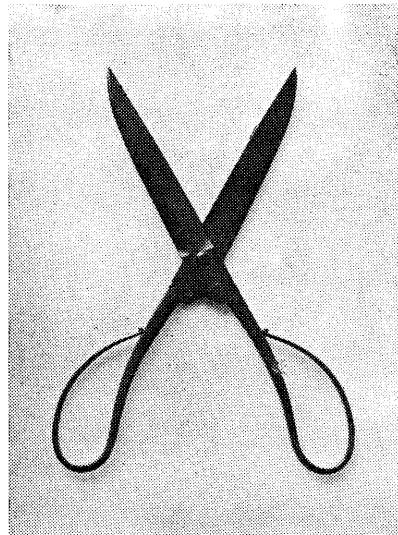
種子鉄は明治末期から第一次世界大戦の始まる昭和初期にかけ、国内で全盛をきわめることになった。一時期は全国の市場の半分近くを占めたことが、堺や県内の商人に『種子』^(注1)などの商標の特許をとられたことや、機械化による大量生産、工場ができたことなどによつて、種子島の

在では、わずかに五軒しか残っていない。

種子鉄は伝来された唐鉄の製法に刃の部分にひねりを加えて改良されたものである。製作は、根気よく三十数回の工程を経て一本一本ていねいに仕上げられる。その特色は、軟鉄に鋼を熔接するツケハガネ作りであり、これは日本古来の刀製作法の技



初めの頃の種子鉄



現在の種子鉄

術をとり入れたものである。種子鉄は元

來、刀鍛冶によつて製作されており、洋鉄の形態と日本刀の伝統技術を折衷させたものである。唐鉄を改良したのは、両方の刃が内面に曲がるようひねりを加えたこと

であり、それは切るほどに互いにすり合うほどに研がれるしくみになっている。

種子鉄の大きさは三寸から九寸まで一寸きさみにある。糸切り、紙切り、裁断用と用途はさまざまであるが、握りの部分が左右対称のため特に左利きの人々に重宝がられる。ある左利きの女の子は、幼稚園の時に種子鉄を使い始めてから三年おきに一寸ずつ大きいのを買ってもらい、今年でもう五

本めになるという話もある。

ところで、この島ではなぜ鉄砲や鉄など高度な技術が修得され、その伝統を支えることができたのだろうか。島の歴史を調べてみると意外に興味深い。余談になるが、タバコや甘藷（サツマイモ）の栽培が日本で最初に伝わったのもここなのである。

この島は維新前まで、直接に薩摩藩の支配を受けず、島主である種子島家によって治められていた。島津の圧政を受けなかつたため島民は比較的自由で、いろいろなものに進取性に富んでいた。また島の四方の海岸からは、良質の砂鉄が豊富に採れ現在でも製鉄所跡がいくつか残っている。地形・風土的にも製鉄に有利なうえ製鉄技術は高かったのである。

このような素地のある種子島に難波船が漂着し、鉄砲や鉄が伝来されて技術修得がなされたのである。鉄砲伝来には、いくつ

もの逸話が残されているが、特に鉄砲製法

私たち島民の願いである。

の技術を教わるため代償としてポルトガル

人に嫁いだ若狭姫の伝説は、種子島人の情熱と先見の明を感じさせる。

こうして文明の先端を走った島の鉄砲作りも、明治十九年に鉄砲鍛冶が大阪の砲兵工廠に徴用されるとともに、その歴史を閉じた。そして残った種子鉄も現在五軒の鍛

治屋のうち後継者がいるのは、わずか一軒である。一人の職人が一日にわずか十本から十五本しか作れず、しかもその価格は安い。技術習得に何年もかかって、利益の少ない鉄作りをしようという人はいない。

* これは『種子鉄』『種子島鉄砲伝來その歴史と謎』などを参考に、また鍛冶職人を訪ねて書いた。

(国立療養所南九州病院児童指導員)



あり、他の商標は種子島の名前がはりついても、種子島産ではない。

注1 種子島産の鉄の商標は“本種”で